

「私の父」

神奈川県 石丸実季

部屋の片隅に百羽鶴が掛けられている。色とりどりの鶴たちは美しくありながら、私たち家族が一度壊れかけたことを物語っている。もう二度と戻りたくはない過去だけれど、あの時過ごした時間を忘れることはできないし、忘れてはいけない。

約四年前、父が病気になった。いつも仕事で家にいる時間が少なかった父が一日中家にいた。丁度その頃反抗期で父が嫌いだった私は、学校から帰ってきていつもいるはずのない人がいるのが嫌で嫌でたまらなかった。心も体もボロボロで痩せこけた父を見て、惨めだと思っていた。そんな父を自分の父親だと思いたくなく、なるべく目を合わせないように避けて生活する日々が続いた。しかしある日、「ごめんな。父さん情けないよな」と言われた瞬間、自分でもなぜかわからないほど涙が止まらなかった。「そんなことないよ」と言ってあげたかったのに言葉が出てこなかった。首を横に振ることが私にできる精一杯のことだった。私が近頃避けていたことを気にしていた父が、こっそり机の上にお菓子を置いてくれたことを思い出した。優しくした父がいなくなるのは嫌だと思った。私にはまだ父が必要だった。

兄弟たちと泣きながら鶴を折った。良くなることだけを願いながら、ただひたすら鶴を折った。そうしてできあがった百羽鶴は父の枕元に置かれたのだった。

それからしばらくは大変な日々が続いた。母も疲れきっていた。姉もそんな母をサポートするのに必死であったし、まだ幼かった妹も幼いながらに状況を理解し、わがままを言わなかった。このまま家族が崩壊してしまったらどうしようと思った。もっと家族でやりたいこともまだまだあったし、私はこの家族が大好きだということにやっと気付いた。

しばらく経って、父は治る確率が低いと言われていた病気を克服した。一番辛かったのは父だったはずなのに、治そうという強い意志を持ち続けていた父をすごいと思う。

今は少し埃をかぶっている百羽の鶴たち。それらを見る度に今が幸せだなと感じる。四年前の出来事は苦しい時も家族がいれば乗り越えられることを教えてくれた。最近は私の進路の事などでぶつかり合う毎日だけど、父と過ごす毎日を大切にしていきたい。私は父が大好きだ。